

いわとまつり 石刀祭

<概要>

石刀祭は頭人¹行事、献馬²、からくり人形を操る山車^{だし}の三つの要素で構成されている。石刀神社蔵古文書などには、江戸時代から著名な祭りであり、祭礼日は8月19日であったことが記されている。近代になって祭礼日が4月19日に変更され、さらに昭和末期から現在のように4月19日に頭人行事^{とうにんぎょうじ}と例祭が、その後の日曜日に献馬^{けんば}と山車行事^{だしぎょうじ}が行われるようになった。

頭人^{とうにん}を出す家を当元^{とうもと}といい、祭礼に関わって供されるものはすべて当元^{とうもと}が負担していたが、平成21(2009)年以降は、お神酒、供え物のみ当元^{とうもと}の負担となり、頭人^{とうにん}の負担を軽減しつつ継承されている。その一方で、頭人^{とうにん}が決定すると祭事の配役を記して通知をし、次第にあたる文書である「差口^{さこう}」が公民館内に張り出され、頭人^{とうにん}宅の玄関にはしめ縄が張られるなど、なお古様^{こよう}な伝承も認められる。

献馬^{けんば}と、からくり人形が付随する山車^{だし}は愛知県、特に尾張を代表する祭礼行事であるが、この両者が併存しているのは稀であり、さらに頭人行事^{とうにんぎょうじ}が山車行事^{だしぎょうじ}と共にあるのは県下では極めて稀で、石刀祭^{いわとまつり}の最大の特徴である。このような特徴は古様^{こよう}な様式を残していることと無関係ではないと考えられ、愛知県あるいは中京圏下に展開している祭礼文化の変遷過程を知るうえで貴重な資料を提供するものである。

石刀祭^{いわとまつり}は、古様^{こよう}な一面を残しつつ、その一方で祭礼行事の担い手は現代にも受け入れられやすいように周到に組織化されており、各地で共同体意識が薄れつつある現在において、昔の面影を今に残す貴重な祭礼である。

-
- 頭人¹ 神社の祭礼等に際し、その準備、執行、後始末などの世話を担当する人。また、その家のこと。
- 献馬² 社寺の祭礼などに奉納するために派手な馬具で飾り立てた飾り馬のこと。また、その馬を用いた祭礼のこと。馬の塔、オマントとも呼ばれる。

いわとまつり
石刀祭



とうにぎょうじ
頭人行事

(一宮市教育委員会提供)



けんば
献馬 (一宮市教育委員会提供)



だし だいしょうぐるま
山車 (大聖車)

(一宮市教育委員会提供)



だし なかやしきぐるま
山車 (中屋敷車)

(一宮市教育委員会提供)